

APRENだより 第13号



(本号より、長崎県技術士会機関紙の名称を変更いたします)

平成18年度のスタートにあたって

長崎県技術士会 会長 犬東 洋志

「光陰矢のごとし」新しい年が明け、寒いさむいと縮こまっていたら桜も咲き新年度が始まっています。

最近の情報化時代が本当に良いのかどうか解らなくなっていました。我がPCにも連日迷惑Mailが配信されマジその消去をしなくては仕事に取り掛かれない状況です。よってHDD内に大切なDataの保存が不可能でいちいちBackUpと面倒なことです。どなたか最良の方法をご教授ください。

しかしながら、APRENも新しい時代に入ります。

1. NERCと協同体制がされること。

我々の事務局が二転三転し会員の皆様にご迷惑をかけていますが、HPをNERCを介して開設できたことで今後協力して各種の企画を行い技術力の向上を図ってゆきたいと思います。会員の方々も大いにNERCを活用していただきたいと思います。

2. Home Pageが開設されたこと。

検討をしてきましたHPが4月はじめからNERCのサーバーを介してログオンできました。詳細は委員長の報告欄を見ていただきますが、正式活用は総会後としますが、今後修正を加えながら会員のために役立つスタイルにしてゆきますのでご意見を寄せて活用ください。唯、修正などがNERCのPC管理者しか取り扱えませんのでご理解ください。

3. 情報伝達ではなく情報取得の時代に。

これからは情報がほしい人が情報を取りに行く時代になります。これまで事務局から情報が必要不必要に関わらず伝達されましたが、今後は会員皆さんがHPにアクセスして自分が必要な情報を得て対処していただくことになります。

但し、PC環境が無い会員にはこれまで同様情報を郵便でお伝えします。

のことによってコスト縮減が図られることは貴重なことです。

最近は、経済状況の影響か、必要性の認識低下か、面倒なのか、Face to Faceでの会話が過小評価される時代です。技術立国を目指すわが国の技術者はこれでは良くないと思います。今後とも各種の企画には万難を排してご参加を期待するとともに健康に十分ご留意してご活躍を祈念し、新年度を迎えてのMessageと致します。

ホームページの開設にあたって

IT委員長 西村 博崇

長崎県技術士会のホームページ(HP)の運用を試験的に

(社)日本技術士会九州支部 長崎県技術士会

平成18年4月1日発行・責任者 犬東洋志

「川に学ぼうかい」の活動紹介

橋口 茂(総合技術監理部門、建設部門)

昨年3月、参加している「海辺きれいにしよう会」の歓送会で、T嶋会長(当時)の「この海にどっからゴミの来よっと思うとっとや。川ぞ。」とのお言葉がきっかけでした。数日後、この話をお伝えした職場の尊敬する先輩のN口さん(本技術士会会員)には、「浦上川のそばに住んどつやつたら、あんたが愛護団体ば立ち上げんね(笑)。」との有難いお言葉をいただき、大きな後押しになりました。

仕事で知り合った長崎大学工学部のK池先生に相談したこと、「やってみましょう」と賛同いただきました。

こうして8月、K池先生、大学院生のトニーさん、私の3名で、川に学ぼうかい最初の活動が実現しました。

◎活動における私の原点

若手技術者の頃に担当した仕事で、都市化に伴い身近な自然が失われ、人々との関わりも希薄になってしまった各地の河川や道路等の荒廃した現場に直面しました。私は仕事を通じて、効率性を追求する社会経済システムや私達の日常生活が問題の根底にあることを知りました。当時は、問題解決の困難さと、仕事で求められる対症療法的な対策とのジレンマの中で、無力感や罪悪感に苦悩していました。

そんな10年ほど前、当時暮らしていた千葉県松戸市内に設立された「新坂川をきれいにする会」に参加しました。

細々と活動するうち、社会経済構造や都市型の生活様式は、高度成長期以降に数十年をかけて浸透・定着しており、簡単には変えられない現実であることを実感しました。

この厳しい現実を受け入れ、事実を見つめて、できることを自然体でやればいいということを会の先輩方の姿に学び、とてもホッとしたのが私の原点になっています。

◎これから取り組み

川に学ぼうかいの活動は、大橋町付近をフィールドに、主に長ぐつを履いて川に入り、または沿川の道路を歩いてゴミを集めるとといったもので、これまで隔月で4回行いました。ゴミを拾うことには限界があり、川に学ぶことをめざしているため、ゴミや生きものの様子を観察したり、ボートとしても構わないとメンバーにもお伝えしています。前回からは、印象に残ったゴミの記録等も開始しました。

会では、防災面を含む自然との共生や循環型のまちづくり、歴史・文化なども意識しつつ、たとえ少人数でも息の長い活動を楽しみながら続けていければと話し合っています。こうしたささやかな体験活動を通じて、暮らしの中での自然とのつながり、森から海までのつながり、流域に関わる方々のつながりなど、様々なつながりを少しづつ回復し、私達のライフスタイルをちょっとでも見つめなおすことができたらいいな・・・と願っています。

私も事務局の立場で、生活・仕事や学校等で流域に關係

